跡見学園女子大学紀要　第33号（2000年３月15日）

プラハ言語学サークルの第９テーゼ

The Ninth Thesis Presented By The Prague Linguistic Circle

飯　島　　周

Summary

This paper is to examine the ninth of the ten theses which the Prague Linguistic Circle presented to the First Congress of Slavic Philologists held in Prague in 1929.

The thesis is translated from the Czech original into Japanese to analyze more clearly.

As its title tells, the thesis deals with the importance of functional linguistics for the cultivation and critique of Slavic languages, putting a stress on the special function of the standard literary language.

It is also noted that excessive purism and archaism should be avoided for the sound linguistic development.

Key word : linguistics, language, functionalism, Prague School

〈はじめに〉

本稿は，標題通りの内容で，飯島1987，1988，1993．と同様に，1929年プラハ開催の第１回スラヴ学者会議に提出されたプラハ言語学サークルのテーゼを検討する試みである。より明確に理解するために，原文の翻訳と注釈を通じてその意義を考察する。従って，重複する部分もあるが，上記の各稿を参照しながら読んで下されば幸いである。

第９テーゼでは，プラハ言語学サークルの基本的主張である機能言語学が，スラヴ諸語の育成と批判，換言すれば言語的標準化の確立に対して，どのような重要性を持つかが論じられている。

当時，第一次世界大戦後のヨーロッパはまだ不安定であり，とりわけスラヴ諸国の動揺は激しかった。幸いチェコスロヴァキアは，T. G. マサリク大統領の指導のもとに，かなり安定していたが，スラヴ圏一般では，社会的安定と共に言語的安定が重要な課題だった。テーゼ中の独立した項目としてこの問題が取りあげられたのは，上述のような情勢があったからと思われる。

ただし，ここに述べられている事柄は，一般理論として，すべての独立した言語に適用可能で

あり，いわば言語政策の基礎となり得る。たとえば，発音および正書法の整備の問題，言語純化の評価，民族的伝統と言語の関係など，日本語の場合にも考慮を要するであろう。これらについては，現在でもなお未解決なものが多く，思考を刺激する。

注釈はできるだけ要点的にまとめるようにしたが，蛇足の感を免かれぬ部分もあるかも知れない。テーゼとは，すなわち討議を呼ぶことを目的とした主張であるから，批判も必要である。しかし，このテーゼに対する全体的な反論は，かなり難しいように思われる。

プラハ言語学サークル結成以来，すでに70年以上が経過し，サークル自体はもはや歴史的存在となっているが，その提示したテーゼは今なお生きている。

（付記）

注の中で原語とあるのは，Vachek 1970. 中の用語。以下仏訳はBrun 1929; 英訳はVachek 1983. ; 独訳はScharnhorst 1976. からの引用である。

〈プラハ言語学サークルのテーゼ　第９項〉

スラヴ諸語の育成と批判のための機能言語学[1]の意義

ある言語の育成とは，標準文語[2]において，書き言葉でも話し言葉でも，標準文語の特別な機能が要請する諸特性を強化しようとする努力である。

まず何よりも問題になるのは，安定性[3]である。すなわち，標準文語から不必要なゆれをすべて取り除くように，そして言語的な安全感を，標準文語自体のためにも作り出すようにすることである；さらに適確性[4]である。すなわち，伝達内容のさまざまなニュアンスを，わかりやすく明確に，微妙に，しかも苦労せずに表現する能力である；最終的に，言語の個性[5]である。すなわち，該当する言語の性格的な諸特徴を強化することである。その際，非常にしばしば問題になるのは，その言語内部に形成されたさまざまな可能性の中から，一つの可能性が取り出されること，又は，一つの潜在的な言語的傾向[6]が意図的に用いられる表現手段に転化されることである。

発音に関しては，上述の基本的要請から次のような必要性が生ずる———すなわち，これまで隣りあって共存したそれぞれの変異形が認められる場合にも，発音を安定させるようにすること。（たとえば，標準的なチェコ語で*sh*-と表記される子音結合が，〔sx〕とも〔zh〕とも発音されること[7]，例　*shoda*〔一致〕など；標準的なセルビア・クロアチア語における発音として，〔ije〕，〔je〕又は〔e〕の発音の共存[8]）

正書法は，単に慣習的で実際的な事柄として，視覚的に区別するというその機能が許すかぎり，容易で明快であるべきである。正書法の規則の頻繁な変更は，特に，容易化するという目的を持

たぬならば，安定化という要請に逆らうものである[9]。本来語の正書法と外来語の正書法との間の矛盾は，少なくとも発音上の混乱に通ずる場合は解消すべきである。(たとえば，チェコ語の正書法における外来語表記の*s*は〔s〕にも〔z〕にも通用している[10])

命名の形式[11]においては，言語の個性的性格が尊重されるべきである———すなわち，緊急の必要性がない場合，その言語で慣用的でない命名の形式を用いるべきではない。(たとえば，チェコ語における複合語[12])

語彙においては，語彙的純化主義[13]の要請に対して，語彙的豊富さと文体的多様性との要請を対比させることが必要である。ただし，その豊富さと同様に，標準文語の機能がそれを必要とする場合には，語彙における意味的適確性と安定性が尊重されるべきである。

統語論においては，言語の個性的表現と，意味的差異の表現の可能性の豊富さが，共に尊重されねばならない。それゆえ，関係する言語特有の諸特徴が強調されるべきである。(たとえば，チェコ語における動詞的表現[14])

しかし，他方では，統語論的純化主義によって，表現のさまざまな可能性の供給を削減してはならない[15]。その適正化は，統語論の場合にも，言語の機能によって統制されるべきである。(たとえば，法律関係，又はその他の専門分野の言語における名詞構文の必要性[16])

形態論が言語の個性的表現のために意味を持つのは，ただそれ自体の一般的体系によるのみであり，詳細な特殊性によるものでは決してない。それゆえ，機能的な立場からは，古いタイプの純化主義者たちによって規範化されたような重要性はもたない。そこで，余分な形態論的古風さ[17]によって，文語的な言葉と口語的な言葉との距離を，不必要に拡大せぬよう注意することが必要である。

言語の育成にとって非常に重要なのは，洗練された話し言葉[18]である；それが源泉となり，そこから書き言葉が，損なわれることなく，絶えず活力を与えられることができ，標準文語の安定性のために必要な言語感覚を，最も安全に育てることが可能な環境を形成する。

標準談話語[19]と同様に，標準文書語も文化的生活の表現手段である。文化的生活は，それぞれの民族において，該当する文化的領域のすべてに共通の文化的資産から，多くのものを借り入れている；そのため，その文化的社会の反映が標準文語の中にも入り込むのは当然であり[20]，その事実に反抗し，言語的純粋性の名において戦うことは正当ではない。

言語的純粋性についての配慮は，上述の説明から推論されるように，言語文化の中に地位を占めている。しかし，誇張された純化主義は，論理的であれ歴史的であれ民間伝承的であれ，いかなるものでも，正当な標準文語の育成を損なう。多くのスラヴ言語の標準文語にとっては，それらの比較的若い伝統のため，又は発展が妨害されたりあわただしかったりしたために，言語の育成についての配慮が非常に必要である。

スラヴ諸語における標準文語の形成については，近年，集中的な仕事が行われており，それは，

安定的な文語の伝統をまだ持たぬ部族の場合にも行なわれている[21]；この仕事の中では，機能言語学に重要な役割が当てられるであろう。すなわち：現存する音韻論的・文法的変異体の中から，標準文語に最も有利なものを選び出すこと———それは，その変異体の示差的な価値によるか，又は拡張のための能力[22]によるか，である；文字と正書法を作り出すこと———それは，音声的転写を求める努力と通時的な面での考慮によるものでは決してなく，共時的音韻論によって統制されるであろう。そしてその際，音韻論的相関関係の表現により，文字の最大限の節約が達成されるであろう[23]；語彙を，特に専門用語の語彙を作り出すこと；語彙の作製には，民族主義的な，又は古語尊重的な考慮を介入させるべきではない。なぜなら，そのような行き過ぎた純化主義は，語彙を貧困にし，余分な同義語を作りだし，専門用語と日常生活用語との，余りにも多くの語源的関係を生み，専門用語にとって有害な連想と情緒的色彩を与え，最終的には，科学的専門用語に余りにも地方的な閉鎖性を与えるからである[26]。

〔注〕

(1)原語*funkční lingvistika*。この概念は，言うまでもなく，プラハ学派の基本的主張であり，言語の解明の方法として，いわゆるmeans-end model〔手段と目的のモデル〕を用いることが多い。換言すれば，言語にとって最重要な機能は思想・感情の伝達である，という明確な指標を持っている。より具体的には，飯島1988；1993を参照されたい。

(2)原語*spisovný jazyk*. “標準文語”という訳語を選んだ理由については，飯島1988に説明がある。なお，この概念は文体的なもので，話し言葉にも通ずる。

(3)原語*ustálenost*. 仏訳*la fixité*；英訳*stability*；独訳*die Stabilität*. この記述は，言語には常にゆれ（原語*kolísání*。仏訳*fluctuations*；英訳*fluctuation*；独訳*Schwankungen*）がある，という認識を前提とする。

(4)原語*výstižnost*. 仏訳*l'aptitude*；英訳*accuracy,*；独訳*die Fähigkeit*. 原語には“真実性”とも訳せる意味がある。

(5)原語*osobitost jazyka*. 仏訳*l'originalité de la langue*；英訳*the specificity of language*；独訳*die Originalität der Sprache*.

(6)原語*latentní tendence jazyková*. 仏訳*une tendance latente de la langue*；英訳*a latent linguistic tendency*；独訳*eine verborgene Tendenz der Sprache*. 言語現象における潜在性も，プラハ言語学サークルの注目点である。

(7)この現象は，チェコ語の発音面でよく指摘される問題点である。すなわち，本来*s*は無声子音，*h*は有声子音であるが，“*sh*は標準文語の発音において，順行同化〔sx〕も逆行同化〔zh〕も認められる”（Československá Academie věd. 1986. p. 153）ただし，これには地域性があり，“逆行同化は（ブルノを中心とする）モラヴィア地方で典型的，順行同化は（プラハを中心とす

る）ボヘミア地方で典型的”（Krčmová 1999. p. 131）である。どちらかに統一するのは困難であろう。日本における東京方言と関西方言の差参照。

(8)この差異も歴史的に生じたもので，セルビア・クロアチア語の標準的基礎とされる，いわゆるシュト方言（štokavština）の下位分類と関係する。すなわち共通スラヴ語の母音＊*ě* が，セルビアのベオグラード中心の方言で〔e〕，クロアチアのザグレブ中心の方言では〔ije〕又は〔je〕となっている。（さらに〔i〕となる方言もある）これに類する現象は，どの言語にも存在する。たとえば，日本語の片仮名でイと表記される母音は，東京，大阪，仙台などを中心とする各地方言で，それぞれ豊なる音価を持つ。この統一も，非常に困難であろう。

(9)たとえば英語などの正書法は，発音との対応関係が問題になるが，視覚的な区別という点では有効性がある———たとえば，*rite, write, right, wright* など。そのため，一種の安定性を持つ，と認められる。日本語における漢字の使用も，十分に意味があるだろう。

(10)現在のチェコ語の表記では，外来語であっても，十分に受入れられた場合，〔z〕には*z*を用いるのが一般的である。たとえばprezident, univerzitaなど。ただし，*s, z* 共に認められるものもある。Martincová. 1993. p. 30. 参照。

(11)原語*formy pojmenování*。仏語*les formes dénominatrices*；英訳*onomatological formations*；独訳*die Formen der Benennungen*. 英訳形は，Mathesius 1961. の基本的な考え方を反映したものである。すなわち，思考内容の言語信号化の過程は，まず言語的に命名可能な諸要素への選択的分析，つまり命名の形式の決定，次に文形成行為による諸要素の統合，である。別の言い方をすれば，まず単語としてどのような形を選ぶか，が出発点となる。

(12)チェコ語の複合語には，当然ながら慣用的なタイプがある。たとえば*malé město*〔小さな町〕→*malomĕsto*；*věda o jazyce*〔言語についての科学〕→*jazykověda* など。

(13)純化主義のほとんどは，民族主義の運動と結びつく傾向があり，時には熱狂的になる。たとえば，第2次世界大戦中の日本における「敵性語排撃」運動など。

(14)たとえば，日本語の「風が吹いている」に対してチェコ語では単一動詞文*Fučí.*；「火事だ!」に対して*Hoří!*を用いる。又は著作（や翻訳）の場合，「カレル・チャペック著（又は訳）」に対し*Napsal*（又は*Přeložil*）*Karel Čapek.*〔文字通りには「カレル・チャペックが書いた（又は訳した）〕とする傾向がある。英語などの名詞的表現の多い言語と対比すると動詞的表現が豊富で，一つの特徴となっている。

(15)注(14)の特徴点にこだわるべきでない場合もある，という主張である。統語論の分野は，言語体系の中で，語彙に比してはるかに閉鎖的であるが，他言語からの影響を受けることもある。

(16)一般には，名詞構文の方が簡潔な感じを与えるであろう。

(17)古風さの判定は困難であるが，文化的伝統の問題と結びつけて考える必要がある。たとえば，日本における「君が代」という表現は，歌詞として，若い世代とどの程度の距離があるのか，など。

⑱原語 *kultivovaný jazyk hovorový*。仏訳 *la langue parlée cultivée*；英訳 *educated colloquial speech*；独訳 *eine gepflegte gesprochene Sprache.*

この種の言語体系の重要性は，まさに指摘の通りである。日常の言語活動では，話し言葉を用いることの方が圧倒的に多いので，書き言葉も当然大きな影響を受ける。

⑲原語 *spisovný jazyk hovorový.* 仏訳 *la langue littéraire de la conversation*；英訳 *the colloquial standard language*；独訳 *die Alltagsliteratursprache.*

この表現は訳し方が難しく，独訳は「標準文書語」の訳 *die Buchliteratursprache* と対比しないと理解しにくい。なお，「標準文書語」の原語は *spisovný jazyk knižní*；仏訳 *la langue littéraire des livres*；英訳 *the standard literary language.*

⑳言語と言語外の現実との関連は，機能言語学での重要課題の一つである。プラハ言語サークルの主要な発展方向には，社会言語学の一部，さらにプラグマティックスが含まれている。

㉑前述のように，スラヴ諸語の標準化はかなり遅れている，という認識があった。特に広大なソヴィエト社会主義共和国連邦のさらなる拡張や内部の再編により，民族的移動も頻繁だったことは，言語の安定にとってかなり不利であったと思われる。

㉒原語 *schopnosti pro expanzi.* 仏訳 *leur aptitude à l'expansion*；英訳 *their ability to expand*；独訳 *ihre Ausbreitungsmöglichkeiten.*〔受けいれやすさ〕とも言えるだろう。

㉓文字の最大限の節約と，一字一音の対応性の確立が理想であるが，理論的な整合性を得るのはなかなか困難である。

㉖専門用語と日常生活用語との混同は，警戒を要する。ただし，専門用語だけの世界を作るのも問題であり，工夫しなければならない。

参考文献

Brun, L. 1929. 仏訳. "Thèse présentées au Premier Congrès des philologues slaves" *TCLP* I. pp. 33-58

Československá Academie věd. 1986. *Mluvnice češtiny.* I. Praha, Academia

飯島　周. 1987.「プラハ言語学サークルの第10テーゼ」『跡見学園女子大学紀要』第20号。

飯島　周. 1988.「プラハ言語学サークルの第３テーゼ」『跡見学園女子大学紀要』第21号。

飯島　周. 1993.「プラハ言語学サークルの第１，第２テーゼ」『跡見学園女子大学紀要』第26号。

Krčmová, M.1999 *Fonetika a fonologie zvuková stavba současné češtiny.* Brno. Masarykova Univerzita.

Martincová, O. 1993. *Pravidla českého pravopisu.* Praha. Pansofia.

Mathesius, V. 1961. *Obsahový rozbor současné angličtiny na základě obecně lingvistickém.* Praha.（邦訳）飯島周. 1981. マテジウス『機能言語学』東京. 桐原書店。

Scharnhorst, J. 1976. 独訳. "Thesen des Prager Linguistenkreis zum I. Internationalen Slawistenkongreß."

Scharnhorst & Ising (ed.) *Grundlagen der Sprachkultur Beiträge der Prager Linguistik zur Sprachtheorie und*

Sprachpflege. Berlin. Akademie-Verlag. pp. 43-73.

Vachek, J. (ed.) 1970a. "Tese předložené Prvému sjezdu slovanských filologů v Praze" Vachek 1970 b. pp. 35-65"

Vachek, J. (ed.) 1970b. *U Základů pražské jazykovědné školy*. Praha. Academia

Vachek, J. (ed.) 1983. *Praguiana Some Basic and Less Known Aspects of the Prague Linguistic School*. Amsterdam & Philadelphia. John Benjamin Publishing Company.

Vachek, J. (ed.) 1983. 英訳. "Theses presented to the First Congress of Slavists held in Prague in 1929" Vachek 1983, pp. 77-120.

(本稿は平成11年度跡見学園特別研究費の助成を受けたものである)